ヨハネによる福音書 9:13-41；「見る目」第2部 – 2026年10月18日

I. 歓迎と振り返り

A. おはようございます！おはようございます！カルバリー・チャペル岩国へようこそ。主であり救い主であるイエス・キリストを称えるために皆さんと共にここに集まれることは、なんと大きな祝福だろう。

1. *初めてお越しの方や、オンラインで視聴されている皆様、ようこそ。*

B. それでは、小学生の子供たちを日曜学校の教室へ送り出そう。

1. 子供たちが退出する間、残りの皆さんは聖書を開き、ヨハネによる福音書第9章の箇所を開いてほしい。

C. 先週、「見る目」と題したメッセージで、ヨハネによる福音書第9章の学びを始めたが、これは複数回にわたる学びになると述べた。

1. 先週は第1部として、この章の最初の12節を取り上げ、盲人がどのようにして目が見えるようになったかを詳しく説明した。

2. イエスは、自分を石打ちにしようとした宗教指導者たちから逃れるため、神殿を出ていく途中、道端にいた盲目の物乞いを見かけ、足を止めた。その男は生まれつき盲目で、生涯を暗闇の中で過ごしてきたことが分かっていた。

3. イエスの弟子たちは、その男が生まれつき盲目であるのは、両親の罪なのか、それとも彼自身の罪なのかを知りたがった。しかしイエスは、そのような誤った神学を退け、これは罪の問題ではなく、神がこの男に、そしてこの男を通してご自身を現わすための機会であると述べた。そして、神は驚くべき癒しの御業を成し遂げられたのだ。

4. イエスは地面に唾を吐き、その土で泥を作り、その泥を盲人の目に塗った。その後、イエスは盲人にシロアムの池へ行き、泥を洗い流すよう命じた。

5. 男はその通りにし、目を洗うと癒され、生まれて初めて日の光を見た。これは、主がこの男に与えた、人生を変えるような癒やしであった。

6. さて、彼が住む地区に戻ると、周囲の人々は皆、彼が癒やされたことに驚き、感嘆した。中には、自分の目や目の前の光景を信じることさえできない者もいた。生まれつき盲目だと知られていたこの男が、突然目が見えるようになり、まるで別人のように町を歩き回っていたのだ。

7. 町中は大いに騒然としていた。誰もがこの男の話をし、一体どうしてそんなことが可能なのか、本当に同じ人物なのかどうかと疑問を抱いていた。人々は驚き、呆然としており、自分の目に見えているものをどう受け止めてよいのか分からなかった。

8. 人々は、誰が彼を癒したのかと盲目の物乞いに尋ねたが、彼が答えられたのは「イエスという名の男だ」ということだけだった。イエスがどこにいるのかと尋ねられても、盲目の物乞いは答えられなかった。彼はイエスの居場所を知らなかったのだ。ただ「わからない」と答えただけだった。

D. そして、そこが今朝、13節から始まる私たちの聖書の箇所であり、学びの第二部「**<u>見る目</u>**」の始まりとなる。今回は、目が見えるようになった盲人に焦点を当てるのではなく、見えている人々がどのようにして盲目になったかに注目していく。

1. 皆さんも、もうヨハネによる福音書第9章を開いていることだろう。そうであれば、神と神の聖なる御言葉を称えるために、皆で立ち上がってほしい。

2. 今朝は、この章の残りの部分を読み通そうと思う。したがって、聖書の箇所は13節から41節までとなる。

3. 私は自分の聖書からこの箇所全体を読み上げるので、皆さんも自分の聖書でできるだけ追いかけてほしい。ヨハネは13節から、この盲人の癒やしを取り巻く出来事の詳細をさらに語り続けている……（R & P）

II. 概要；

A. 今朝の聖書箇所は、二つの並行する展開を示している。

1. 一方には、かつて盲目だった男の霊的な洞察が深まり、イエスがまさにどのようなお方であるかを理解していく過程がある。

2. 他方、ファリサイ派の人々の霊的な盲目化の進展がある。それは、彼らの目の前に極めて明白に示されている真理を見ようとも受け入れようともしない姿勢によって際立っている。

B. 今回は普段よりも広い範囲の聖書を扱うため、通常ほど深く掘り下げることはできないが、私たちが神の御言葉を聞くために集まっている今、神が私たち一人ひとりに何かを備えてくださっていると信じている。

C. メモを取ったり、本文の要約を作成したりするのが好きな方のために、私が勝手に本文を5つのセクションに分けておいた。それぞれが、この物語に登場する様々な人物たちによる5つの異なる出会いを取り上げている。

D. まずは、かつて盲目だった男とパリサイ人たちとの最初の出会い、そして彼らの「**<u>詳細についての議論</u>**」を見ていく。私と一緒に13〜17節をもう一度見てみよう。

III. ヨハネ9:13-17；詳細についての議論

A. さて、先週の学びでは、大きな話題と興奮の中で話を終えた。人々は皆、目の前で起きていることをどう受け止めればよいか戸惑っていた。これは神による真の奇跡なのか？それとも単なる詐欺や茶番なのか？人々を煽り、操ろうとする者の仕業なのか？

B. 疑念や不確実性があまりにも大きかったため、人々はこれをパリサイ人たちの耳に届けることにした。パリサイ人とは、当時の宗教的指導者であり、神事に関する専門家とされる者たちだった。

1. 一世紀当時、パリサイ人たちはユダヤ教の守護者と見なされていたため、人々がこの件を彼らの裁きに委ねることは理にかなっていた。

2. 何しろ、もしそれが実際に神からのものではなかった場合、人々は「神からの奇跡が起こった」などと広め回ったりはしたくなかったのだ。

C. さて、14節には、その日が安息日であったという情報が記されている。これはファリサイ派にとって極めて重要な詳細だった。

1. 宗教指導者たちは、以前にも安息日におけるイエスの癒やしについて問題視していた。したがって、イエスが再びそれを成し遂げたという事実は、一部の人々にイエスを完全に拒絶させる原因となるだろう。

D. かつて盲目だった男がパリサイ人たちの前に連れて来られると、彼らは彼に、どのようにして目が見えるようになったのか話すよう求めた。

1. ここでファリサイ派に善意の解釈をすれば、彼らが何が起きたのかの詳細を知りたがった理由も理解できる。彼らは、これが真に神による業であるかどうかを判断するよう求められているのだから、詳細を突き止めようとするのは当然のことだ。

2. その男はただこう答えた。「彼［イエスのこと］が私の目に泥を塗り、私が顔を洗ったら、見えるようになった。」極めて単純で、極めて率直な答えだ。

   a. 一部の人々は、彼が自分自身やイエスを罪に問われるのを避けたかったため、詳細を曖昧にしたのではないかと指摘している。安息日に粘土を作ることは、宗教当局によって「仕事」とみなされていたからだ。

      i. この頃までに、宗教指導者たちは「仕事」とは何かを定義しようと試みており、安息日に禁じられる39種類の「仕事」を定めていた。

      ii. 「練り合わせ」もその一つだった。練り合わせとは、液体を使ってばらばらの粒子を結びつける行為を指す。したがって、土や粘土を唾液と混ぜ合わせることは、練り合わせの一種と見なされ、安息日には禁じられていたのだ。

      iii. もしその男がパリサイ人たちに「イエスが粘土を作った」と告げれば、彼らは即座にそれを安息日の違反と見なしただろう。

   b. そこで、その男は「イエスが粘土を作った」と言う代わりに、単に「イエスが私の目に粘土を塗った」とだけ言ったのだ。そして、おそらくこの男がファリサイ派の人々に情報を伝える際、慎重を期そうとしたという考えには、ある程度の真実があるのだろう。

E. そして、ファリサイ派の人々が元盲人の証言を聞いたとき、それは結局、宗教指導者たちの間に分裂を引き起こすことになった。

1. ある者たちは、イエスが安息日を守らなかったから、神から遣わされた者ではないと断じた。

2. たとえ粘土をこねて作ったことについては有罪と見なされなかったとしても、口伝の伝統では、人命に関わるものでない薬や治療を施すことも禁じられていた。

   a. 安息日の癒しは「仕事」とみなされ、したがって安息日法の違反とされた。

   b. 唯一の例外は、緊急事態における人命救助のための処置の場合だった。宗教当局は、その場合は癒やしても構わないと述べたが、繰り返しになるが、それは怪我や病気が命に関わる場合に限られていた。

   c. 安息日に行われたその他のあらゆる種類の治療は、「仕事」とみなされ、安息日法の違反となる。

   d. ここで重要なのは、イエスが神が意図した通りの安息日を破ったことは一度もなかったということを理解することだ。イエスはしばしば律法を破ったと*非難されたが*、実際には、彼らが律法の条文に対して下した独自の*解釈*に、イエスがしばしば反していたのである。

   e. イエスは安息日を破ったことは一度もなかった。しかし、神の律法と御言葉の真髄に反する、人間が作り出した伝統や解釈を守ることに、イエスはこだわらなかった。

3. 他の人々はこれに同意しなかった。彼らは、罪人がそのようなしるしを行うことができるという考えに疑問を抱いた。

   a. 盲人を癒す能力は確かに驚くべきものだったが、決して不可能なことではなかった。何らかの病気や疾患によって一時的に失明し、病から回復した後に視力を取り戻した人々もいたのだ。

   b. しかし、生まれつき盲目だった者が視力を取り戻すなどという考えは、前代未聞だった。そして、生まれつき盲目だったこの男が、今や突然見えるようになったという証言を前にして、一部のパリサイ人たちは単に目を背けるわけにはいかなかった。

   c. 彼らはこの癒やしを「しるし」と呼んだ。ここでのギリシャ語は、奇跡や不思議を指す言葉として使われている。詳細を聞いた者の中には、これが実際に奇跡、すなわち「しるし」であると結論づけた者もいた。

      i. これには驚くべきではない。ヨハネの福音書の前の箇所で、ファリサイ派の一人であるニコデモがイエスのところに来て、こう言っていた。「ラビ、私たちは、あなたが神から遣わされた教師であることを知っている。神が共におられない限り、あなたがなさるようなしるしを誰も行うことはできないからだ。」（**ヨハネ3:2**）

      ii. おそらく、これを真のしるし、すなわち神からの紛れもない奇跡だと信じた人々の先頭に立っていたのはニコデモだったのだろう。確かなことは言えないが、そうであっても不思議ではない。彼はすでにイエスについて同様のことを述べており、その後、長年にわたり主の秘密の信者となったことは周知の事実だ。

F. 集団が意見が分かれたとき、彼らはかつて盲目だったその男自身に目を向け、目が開かれたという事実に基づいて、彼がどう思うか、その男について何と言うか尋ねた。

1. その男は「彼は預言者だ」と答えた。ここで、かつて盲目だった男の霊的な洞察力が深まっていく様子がうかがえる。

2. 彼が初めてイエスについて語ったとき、単に「ある人」だと言っただけだった。「イエスという人が、泥を作って私の目に塗り、『シロアムの池に行って顔を洗え』と言った。そこで私は行って顔を洗い、目が見えるようになった。」（**ヨハネ9:11**）

3. 当初、この盲目の物乞いにとって、イエスは単なる「人」に過ぎなかった。しかし、イエスに触れられ、奇跡的な方法で癒やされた後、このかつて盲目だった物乞いは、このイエスという人物が単なる人間以上の存在であり、預言者でもあるに違いないと理解するようになったのだ。

4. ここでの「預言者」という言葉は、神の導きによって預言者あるいは神の使者として行動し、神から遣わされたあらゆる人を指す。

5. イエスが預言者であると述べることで、この男はイエスが神の代表として、神によって遣わされたのだと宣言している。それはある程度真実であった。しかし、これから見ていくように、イエスは単なる預言者以上の存在である。

G. かつて盲目だった物乞いの霊的な洞察力が深まる一方で、パリサイ人たちの霊的な洞察力が衰えていく様子も見て取れる。

1. イエスの行いが神からの真のしるしであることを受け入れる者もいたが、他の者たちは自分の考えに固執しすぎて、その詳細を検討しようとはしなかった。証拠に従うのではなく、証拠を否定する理由を探し始めたのだ。

2. 彼らは、ある男が神によって癒やされたという事実に注目するのではなく、安息日に癒やされたという事実にばかり目を向けたのだ。

3. 彼らは、目の前にある証拠——すなわち、自分たちの真ん中で真の奇跡が起こったという事実——を検討することよりも、安息日や自分たちの伝統や解釈を重んじることに重点を置いていたのだ。

4. そして、この対比は、今朝私たちが考えるべき重要な点を浮き彫りにしていると思う。かつて盲目だった物乞いは証拠を検討し、それに導かれて結論に至ったのに対し、パリサイ人たちはあらかじめ結論を決めつけ、その結論に合わせて証拠を無理やり説明しようとしたのだ。

5. 一方は神に近づいたが、他方は神から遠ざかってしまった。私たちは、聖書の証拠がどこへ導こうともそれに従う覚悟を持ち、自分自身の先入観や考えによって、主からの霊的な洞察を受け取ることを妨げられてはならない。

a. 私たちは、神や神の世界、そして神がその世界でどのように働かれるかについて、神がどのようなお方であり、私たちの生活の中でどのように働かれるかという理解を深めることを妨げかねないような、先入観や考えを抱いてはいないだろうか。私たちは、証拠を真摯に検討し、それが私たちを真理へと、キリストへと導くようにしなければならない。

b. 真理は常に**私たちをキリストへと指し示す**。なぜなら、キリストこそが真理だからだ。もし私たちの結論がキリストから遠ざけ、御言葉から目を背けさせるものであるなら、それは真実ではない。それらは誤った結論であり、キリストと御言葉の光に照らして再評価する必要がある。

H. それでは、両親とパリサイ人たち、そして彼らの「**救いの否定**」について扱う次の節に進もう。

IV. ヨハネによる福音書 9:18-23；癒やしの否定

A. パリサイ人たちは意見が分かれており、この男が今や見えるようになったという事実を否定できなかったため、彼らの最善の策は、彼の盲目が癒やされたこと自体を否定しようとすることだと決めたのだ。

B. 18節には、ユダヤ人たちが「彼」について信じなかったと記されている。「彼」とは、生まれつき盲目だったが今は見えるようになったと主張した男のことであり、

1. 彼らは、この男が今や目が見えることを否定できなかったため、彼が生まれつき盲目であったという事実を否定しようと試みた。そして、自分たちの主張を裏付けるために、両親を呼び出し、息子のことや、彼の出生に関する話の真実性について証言させた。

C. 彼らは両親に二つの質問をした。「あなたがたが生まれつき盲目だと言うこの男は、あなたがたの息子か？」、「では、どうして今、見えるようになったのか？」。

1. もし両親が質問に答えることを拒めば、宗教指導者たちから大変な厄介事に巻き込まれることになる。また、もし彼らが聞きたくないような答えを返したとしても、やはり厄介な事態に陥ることになる。

2. この尋問と、かつて盲目だった男の救いを否定しようとする試みの根底にあるのは、人を恐れる心だ。

3. 宗教指導者たちはすでに、もし誰かがイエスをキリスト、すなわち彼らが待ち望んでいたメシアであると告白したなら、その者は会堂から追放され、破門されることになる、と決めていたのだ。

a. 「キリスト」という言葉はイエスの名前の一部ではなく、称号である。「キリスト」という言葉は「メシア」と同じ意味だ。両者とも、それぞれの言語において同じ意味を持つ。

b. ギリシャ語の「クリストス」は「油注がれた者」を意味し、ヘブライ語の「マシヤフ」[maw-shee-akh]も「油注がれた者」を意味する。どちらも、ユダヤ人が待ち望んでいた、彼らを圧制者から救い出すメシアを指している。

4. そしてユダヤ人たちは、もし誰かがイエスを待望のメシアであり救い主であると公言したなら、その者を信仰共同体から破門するとすでに決めていた。その者はユダヤ人社会全体から排斥され、軽蔑されることになるのだ。

5. パリサイ人や宗教指導者たちは、民衆に対して多大な権力と影響力を持っていた。彼らは、誰かが現れて自分たちの権力を奪おうとしたり、その権威を損なおうとしたりするのを快く思わなかった。そのため、彼らは権力を利用して人々を脅し、自分たちの言う通りに従わせた。さもなければ、宗教的エリート層の怒りを買い、ひいては共同体全体からの非難に直面することになるからだ。

6. 聖書は正しく、「人を恐れることは罠をもたらす」と宣言している。

a. 箴言29章25節にはこう記されている。「人を恐れることは罠となる。しかし、主を信頼する者は安全である。」（**箴言29:25**）

b. イエスは地上の宣教の初期に、こう宣言された。「体を殺しても、魂を殺すことのできない者たちを恐れてはならない。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（**マタイ10:28**）

c. 人々は間違ったものを恐れている。人を恐れるべきではなく、主に対して健全な畏れと敬意を抱くべきだ。

d. イエスはこう言われた。「この姦淫と罪に満ちた世代において、わたしやわたしの言葉を恥じる者なら、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使いたちを伴って来るとき、その者を恥じるであろう。」（**マルコ8:38**）

e. 人を恐れ、人が自分に何をするかを恐れるのは、極めて近視眼的だ。**人を恐れるあまり**、キリストや、キリストが私たちや他の人々のうちになされた御業を**尊び**、栄光を帰することを**妨げては**ならない。

f. イエスが再臨し、主ではなく人を恐れた者たちすべてを恥じ入らせる日がやってくる。

g. 私たちの焦点と注意は、人がどう思うか、あるいは人が私たちに何をするかということではなく、主ご自身、主がどうお考えか、そして主を愛し、主によって召された者たちのために主が何をしてくださるかに向けられるべきだ。

h. 主が私たちについてどうお考えになり、何とおっしゃっているかを理解すれば、人が私たちについてどう思おうと、何と言おうと、実はどうでもよくなるのだ。

D. さて、この両親は明らかに恐れている。22節で、彼らが恐れに基づいて反応したと述べられている。

1. 最初の質問をされたとき、彼らは、かつて目が見えなかった男が自分の息子であり、実際に生まれつき目が見えなかったことを否定しなかった。

2. しかし、息子が今どうして見えるようになったのかという二番目の質問に答える際、彼らは、息子がどのようにして癒やされたのか、また誰が関わったのかは知らないとただ述べることで、その質問をかわした。彼らは、それがどのようにして起こったのか、あるいは誰が息子の目を開いたのかについては答えようとしなかった。

3. さて、彼らの息子はきっと彼らに話したはずだ。彼らも他の人たちと同じ話を聞いたと確信している。イエスが彼の目に泥を塗り、シロアムの池で顔を洗うように告げ、彼がその指示通りにしたとき、癒やされたという話だ。彼らがその話を聞いたことは間違いない。

4. しかし、彼らはここでは基本的に責任を転嫁しようとしている。彼らはその現場にいなかったため、何が起こったのかを正確に証言したくないのだ。

   a. 彼らは基本的に、息子が間違いなく話したであろう話を繰り返した際に降りかかるであろう罰から、自分たちを救おうとしているのだ。繰り返すが、人を恐れる心が彼らを罠に陥れたのである。

   b. 彼らは真実を貫くのが怖すぎるのだ。宗教指導者たちや、彼らが自分たちに何をするかを恐れ、また、もし息子やイエスに関するその証言に味方すれば、周囲の人々がどう反応するかを恐れているのだ。

5. そこで彼らは、基本的にこの件への関与を避けようとし、息子は成人しており、自分で話せるのだから、詳細を知りたければ宗教当局が直接彼に尋ねるべきだと言うのだ。

6. しかし、そこがまさに問題なのだ。パリサイ人たちは詳細を求めているわけではない。彼らは真実を求めているわけでもない。単に、この男とイエスが行った奇跡の信用を傷つける方法を探しているだけなのだ。

E. 本文に戻ろう。24〜34節を読みながら、ファリサイ派と元盲人との間の第二ラウンドの尋問、そしてその中で元盲人がどのように「**データを推論した**」かを考えてみよう。私が聖書を読むので、皆さんも自分の聖書で追ってほしい。

V. ヨハネ9:24-34；データから推論する

A. 宗教指導者たちが、かつて盲目だった男を二度目の尋問のために連れ戻したとき、彼らはまず、その男を威圧しようとして大げさな演出から始めた。要するに、「神に栄光を帰せよ！」と要求することで、彼に宣誓をさせたのだ。

1. これは、公式の聴聞会や裁判におけるユダヤ式の宣誓の一形態だった。これは、ヨシュアがアカンに、彼がエリコから奪った戦利品について問いただした際に言った言葉でもある。この出来事については、数週間後に、週半ばのヨシュア記の学びの中で取り上げる予定だ。

2. ヨシュアはアカンにこう言った。「わが子よ、お願いだ。イスラエルの神、主に栄光を帰し、主に告白し、今、あなたが何をしたかを私に告げよ。私からそれを隠してはならない。」（**ヨシュア記7:19**）

3. これらのパリサイ人たちは、基本的に、かつて盲目だったこの男に同じことをさせようとしているのだ。自分の過ちを告白させるためだ。イエスは単なる罪人に過ぎないと告白させるためだ。

4. わかるだろう、彼らは真理を求めていたわけではない。彼に「真実のみを、ありのままに」語れと求める宣誓の場などではなかったのだ。

5. いや、彼らは彼に、自分たちが聞きたいことだけを言わせようとしていたのだ。イエスは罪人であり、これはすべて単なる大がかりな詐欺だと認めさせようとしていたのだ。

B. しかし、両親とは異なり、かつて盲目だった男は、彼らの威嚇に屈しなかった。彼は圧力に押しつぶされることなく、キリストが自分の人生において成し遂げたことについての証言に立ち続けた。

1. 彼は大胆にこう宣言した。「その方が罪人かどうかは、私には分からない。ただ一つ分かっているのは、以前は目が見えなかったが、今は見えるということだ。」

2. かつて盲目だったその物乞いは、すべての答えを持っていたわけではない。イエスの本質がどうであるか、イエスが罪人であるかどうかは知らなかった。彼が知っていたのは、イエスが自分を癒してくださったということだけだ。彼は盲目だったが、今は見える。

3. そして、それは私たちの証しに関して、私たち全員がその重要性を認識すべきことだと私は思う。証しを分かち合うために、すべての答えを持っている必要はないのだ。

   a. 今でも多くの人々は恐れに支配されている。人々は、自分の証を分かち合ったり、他者に福音を伝えたりすると、答えられない質問をされるのではないかと恐れている。そのため、彼らは沈黙を守り、イエスが自分の人生でなされたことを誰にも話さないのだ。

   b. すべての答えを用意する必要はない。人々は聖書に関する様々な疑問について、あらゆる点であなたと議論を交わすかもしれないが、あなたの証そのものを否定することはできない。イエスがあなたの人生において成し遂げてくださった御業を、彼らは否定できないのだ。

   c. 私たちは**大胆に自分の物語を他の人と分かち合い**、キリストが私たちの心と人生に成し遂げてくださった御業を伝えることができる。相手が「そんなことはなかった」などと言うだろうか？

      i. 「イエスは私を薬物やアルコール依存という束縛から解放してくれた。」彼らは「そんなことはなかった」と言うだろうか？

ii. 「イエスは、離婚裁判へとまっしぐらだった私の結婚を救ってくれた。」彼らはそれに異議を唱えられるだろうか？

iii. 「イエスは御言葉を通して私に語りかけ、救い主が必要であることを明らかにしてくださった。」人々はあなたの証しを否定できない。それは、イエスがあなたの人生でなされたことについてのあなたの物語なのだ。

iv. それを分かち合うことを恐れてはならない。そこには力があり、神は私たちの証しを用いて他の人々を励まし、促したいと願っておられる。そして、神がどのように彼らに手を差し伸べたかという、彼ら自身の証しへと導くためだ。

C. かつて盲目だったこの男は、キリストが自分の人生に成し遂げてくださった御業を恥じたりはしない。そして、宗教指導者たちが再びイエスが何をしたのか話すよう求めても、彼は態度を変えない。むしろ、さらに踏み込んで、彼らの目の前でその出来事が起こった日付を導き出し始めるのだ。

1. 彼は言った。「ほら、何が起きたかはもう話しただろう。どういう経緯で、イエスが何をしたかもすでに話した。お前たちはただ私の話を聞いていないだけだ。事実を無視し、それを否定しようとしているが、それで真実が変わるわけでもないし、事実が変わるわけでもない。」

2. 彼はさらに、彼らもまたイエスの弟子になりたいがために、イエスにそれほど興味を抱いているのだとほのめかし、少しばかり立場を逆転させた。

3. これで確かに彼らの注意を引いた。彼らは彼を罵倒し、言葉で攻撃し、*彼は*イエスの弟子であり、*自分たちは*モーセの弟子だと主張した。

   a. しかし、第5章で既に指摘したように、彼らも実際にはモーセの弟子でも信奉者でもなかった。なぜなら、彼らはモーセがイエスについて記したことを信じていなかったからだ。

   b. イエスはこう言われた。「もしあなたがたがモーセを信じるなら、わたしをも信じるはずだ。モーセはわたしについて書いたからだ。」（**ヨハネ5:46**）

4. 彼らはイエスがどこから来たのか知らないと主張したが、ヨハネの福音書のそれ以前の部分では、イエスがどこから来たのか、イエスがヨセフとマリアの子であり、ナザレの大工の子であることを確信を持って主張していた。

   a. 彼らの霊的な闇と盲目への進行は深まっている。彼らは真理を受け入れようとしないため、ただ声を荒げて叫び始め、意味をなさないあらゆることを言い始めるのだ。

5. しかし、かつて盲目だった男は、彼らにその実情を明らかにする。彼が「これは驚くべきことだ」と言うとき、それは要するに、神の知恵と真理を伝えるべき立場にある人々が、これほど明白で単純な事柄さえ見抜けないというのは、実に奇妙で異例なことだ、と述べているのだ。

   a. 彼は単純な理屈と論理を用いて、唯一あり得る説明を導き出す。

   b. 彼はこう言う。「ほら、神は私の目を開いてくださった。私は生まれつき盲目だったが、今は見える。そして、神は罪人の声に耳を傾けない（あるいは罪人の命令に従い、彼らの言うことを聞いて指示通りに動いたりしない）ことは、私たちも知っている。

   c. また、神は御自身を礼拝し、御心を行う者たちの声に耳を傾けることも知っている。神に従う者、神を礼拝する者たちは、神に聞き入れられ、神は彼らを通して働かれるのだ。

   d. また、世が始まって以来、生まれつき盲目だった者が癒やされたという話を誰も聞いたことがないことも分かっている。

   e. これらすべてを総合すると、この人が神から遣わされたという説明こそが、唯一論理的かつ妥当な説明となる。

6. しかし、ファリサイ派の人々は、この唯一の合理的な説明を受け入れる代わりに、さらなる侮辱を浴びせ、ついには彼を追い出した。彼の人生におけるキリストの御業についての証し、真実を語り、彼ら自身には盲目すぎて見ることのできなかった真理を教えたという理由で、彼を破門したのだ。

D. 35〜38節に進もう。そこでは、盲目の物乞いにイエスが再び近づき、「**救い主の発見**」について語られている。見てみよう。

VI. ヨハネ9:35-38；救い主との出会い

A. 私は35節が本当に大好きだ。イエスは、かつて盲目だった男が追放されたと聞き、彼を探し求めた。イエスは行って、彼を見つけたのだ。この光景は実に美しく、神の働きを雄弁に物語っている。

1. 宗教指導者たちに追い出された男、共同体から疎外された男、拒絶された者――イエスが探し求めたのは、まさにこのような人だった。世間はかつて盲目だった物乞いを拒絶したが、イエスは現れて、要するに「私があなたを受け入れる」と告げたのだ。

2. 聖書は、神がこの世の愚かな者たちを選ばれる様子を描いている。パウロはコリントの信徒への手紙第一でこう書いている。「兄弟たちよ、あなたがたの召しを見よ。肉による知恵ある者は多くなく、力ある者は多くなく、高貴な者は多くないのだ。 しかし、神はこの世の愚かな者たちを選んで、知恵ある者たちを恥じ入らせ、この世の弱い者たちを選んで、強い者たちを恥じ入らせた。また、神はこの世の卑しい者たち、見下されている者たち、何もない者たちを選んで、ある者たちを無に帰らせ、いかなる肉も神の御前で誇ることのないようにされたのだ。」（**Iコリント1:26-29**）

3. 神は、見捨てられた者、軽蔑された者、愚かな者、弱い者、卑しい者、ごく普通の「凡人」を受け入れ、「*これで十分だ。私のチームに迎え入れよう。君が持っているものを、私の栄光と君の益のために用いる*ことができる」と言われるのだ。

4. **キリストの中には**、常に**私たちのための場所**がある。世が私たちを拒み、関わりを持たないとき、キリストは私たちを歓迎してくれる。キリストは軽蔑され、拒絶された者たちを探し求め、彼らを自分のものとするのだ。

B. 宗教指導者たちから軽蔑され、拒絶されていたこの男のもとへ、イエスはやって来てこう尋ねた。「あなたは神の子を信じるか？」

1. かつて盲目だった物乞いは、「主よ、その方はどなたですか。そうすれば、その方を信じることができます」と答えた。この一連の流れが見えるだろうか。最初はイエスはただの人間であり、次に預言者となり、そして明らかに神から遣わされた方であることが明らかになった

、彼が自分の師であり、導き手であり、主であることを知る。彼は、イエスが分かち合えるあらゆる真理を、喜んで受け入れる準備ができているのだ。

2. 彼は、「神の子が誰なのか教えてほしい。そうすれば信じられる」と言う。彼は真理を求める者だ。神の子が誰なのかを知りたがっており、イエスは彼の期待を裏切らない。

3. イエスはこう宣言した。「あなたたちはすでに彼を見ている。今、あなたたちと語っているのが、まさにその人だ。」私は、この男の顔に大きな安堵の表情が浮かんでいるのを目に浮かべる。まるで、イエスが神の子であることを願っていたかのように、今やそれを確信したのだ。彼の心と顔には、大きな喜びが満ちていたに違いない。

4. 彼は「主よ、信じます！」と答え、その瞬間、まさにその場所でイエスを礼拝した。

5. かつて盲目だったこの男は、完全な変容を遂げたのだ。目が見えず何も見ることができなかった状態から、イエスが彼の中に、そして彼を通して完全に現されるに至った。イエスが誰であるかという彼の理解は、単なる人間から、預言者、神に遣わされた者、師、そして神の子であり、自分の人生の救い主であり、あらゆる礼拝に値する方へと変化していった。

6. この盲目の物乞いの生涯に見られる驚くべき成長、そして神が彼の中に御自身をどのように現されたか。

C. 一方、パリサイ人たちは全く逆の物語だ。彼らは霊的な洞察力を深めるどころか、キリストからますます遠ざかっていった。光へと近づくどころか、闇の中にますます深く沈んでいったのだ。

D. 最後の聖句を見て、イエスと共にいたパリサイ人たちと、イエスが「**診断を下す**」様子に目を向けながら、この学びを締めくくろう。

VII. ヨハネ9:39-41；「診断」の宣告

A. イエスが「わたしは裁きのためにこの世に来た」と言われたとき、それはヨハネによる福音書第3章で以前に語られたことと矛盾するものではない。

1. ヨハネの福音書第3章で、イエスはこう言われた。「神は、御子をこの世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。 御子を信じる者は裁かれない。しかし、信じない者はすでに裁かれている。それは、神の独り子のお名を信じなかったからである。そして、この裁きとは、光が世にきたのに、人々は光よりも闇を愛したということである。彼らの行いが悪かったからである。」（**ヨハネ3:17-19**）

2. イエスは裁くために来たのではない。救うために来たのだ。しかし、イエスの到来は、信じない者たちにとって裁きと定罪をもたらす。

3. 彼らはすでに裁かれている。イエスの到来が彼らを有罪にしたわけではない。彼らはすでに有罪であり、その裁きから逃れる唯一の道は、神の独り子への信仰を通すことである。

B. イエスは、ご自身の到来が、見えない者たちに見えるようになる機会を与えることを説明している。同時に、ご自身の到来は、見えていると主張しながらも信じない者たちに対する裁きももたらす。彼らの不信仰は、彼ら自身の霊的な盲目と裁きへとつながるのだ。

1. イエスと共にいたパリサイ人たちは、イエスの言わんとしていることを察し、「私たちも盲目なのか」と問いかけた。それに対し、イエスは自らの診断を下してこう答えた。「もしあなたがたが盲目であれば、罪はなかっただろう。しかし、今、『私たちは見ている』と言う。それゆえ、あなたがたの罪は残っているのだ。」

2. 彼らは知識があると主張し、見ていると主張しながらも、自分たちが救い主を必要としていることを容易に認識できなかったため、結局のところ、彼らは罪の中に留まることになった。彼らは闇の中に留まったのだ。

C. この盲目の物乞いの物語は、ファリサイ派の人々が絶対的な闇へと霊的に後退していく様子を描いているのと同様に、神の啓示に向けた霊的な成長についても語っているのだ。

1. 物乞いが信仰における奇跡的な進展を経験した一方で、パリサイ人たちは驚くべき霊的退廃を辿り、自らの偏見によって、目の前に立っているメシアさえも見えなくなってしまったのだ。

2. 振り返ってみれば、その経緯がわかるだろう。彼らは当初、単に内部で意見が分かれていただけだったが、やがて自らの偏見が証拠を覆い隠すようになり、気に入らない事実を拒絶し、敵意と恐怖をあおるようになり、彼らに真実しか語らなかった男を追い出し、最終的には自分たちの盲目さが暴かれるに至ったのだ。

3. これらの人々は、神の律法と神の真理の守護者であるはずだったにもかかわらず、まさに神の御子が自分たちの目の前に立っているという事実に対して、完全に盲目となってしまったのだ。

D. 実のところ、この物語の冒頭において、物乞いもパリサイ人たちも、どちらも霊的に盲目だったのだ。

1. 一人は真理を受け入れる心を持っており、それが神の啓示へと導かれ、神の御子の足元にひれ伏して礼拝することになった。

2. もう一方は真理に対して心を閉ざし、最終的には真理を必要としない、すでに十分な真理を持っていると感じてしまった。彼らは自分たちは見えていると主張したが、自らの必要性に気づかず、闇の中に留まり続けた。それは彼らの行いが悪かったからであり、光の中に出て、霊的に欠けている者としてその実態を暴かれることを望まなかったからだ。

3. 「知るべきことはすべて知っている」と考えることには危険が伴う。学ぶべきことはもう何もないと感じる時にも、危険が潜んでいる。成長を止め、神がご自身を私たちに現わされることを許さなくなった瞬間、私たちは、必要な知識をすべて持っていると感じていたパリサイ人たちのような存在になり始めるのだ。

4. 盲目の物乞いは、キリストへの必要性を認め、それを見出し、より大きな光を受けた。一方、パリサイ人たちはキリストを否定し、自分たちにキリストは必要ないと感じた。彼らは罪の中に留まり、さらに深い闇へと陥ったのだ。

E. そして、私たちへの教訓は明らかだと思う。私たちは**キリストへの必要性を認めているのか**、それとも必要はないと主張しているのか。私たちは物乞いのようか、それともパリサイ人のようか。

1. もしキリストへの必要性を認めるなら、それは霊的な成長と、神からの絶え間ない啓示へとつながるだろう。
2. もし必要がないと主張すれば、闇の中に置き去りにされ、罪の中に留まることになる。さらなる成長や発展の必要がないと考えるなら、結局はこれらのパリサイ人たちがたどり着いたのと同じ道を辿ることになるだろう。事実を否定し、最終的には霊的な闇と裁きへと導かれるのだ。
3. イエスは世の光である。イエスは私たちにその光を照らしてくださり、私たちがイエスのもとへ来て、光の中に入り、イエスを必要としていることを認めることを望んでおられる。
4. 教会内で私たちが直面する最大の課題と危険の一つは、あからさまな反抗ではなく、宗教的な自己満足である。私たちはパリサイ人のように振る舞い、聖書の知識があると主張し、毎週の礼拝に出席し、他者に教え、場合によっては指導的な立場にさえあるにもかかわらず、神が私たちの中で、そして私たちを通して成し遂げようとしておられる御業に全く気づいていない。私たちは見ていると主張しながら、神が成し遂げようとしておられることを完全に見逃しているのだ。
5. そして私の祈りはこうだ。「神よ、私たちに見る目を与えてください。あなたが私たちの中で、そして私たちを通してなそうとしていることを見る目。あなたへの絶え間ない必要性を認める目。私たち自身の霊的な盲目さや、自己満足に気づき、それらをあなたの御前で告白する意志を持つ目。」祈ろう。